

# ホームレスを生み出した社会とあるべき支援

—THE BIG ISSUE とスープの会から見る支援のバランス—

新 渡 戸 滯

## 目次

はじめに

### 1. ホームレスについて

- 1. 1 ホームレスとはどのような人たちなのか
- 1. 2 ホームレスを生み出した社会構造や社会的要因
- 1. 3 ホームレスに対する国の支援の現状

### 2. THE BIG ISSUE

- 2. 1 THE BIG ISSUEについて
- 2. 2 THE BIG ISSUEが目指す支援
  - 2. 2. 1 雑誌販売からみるTHE BIG ISSUE
  - 2. 2. 2 人とのつながりからみるTHE BIG ISSUE
- 2. 3 THE BIG ISSUEの機能

### 3. スープの会

- 3. 1 スープの会について
- 3. 2 スープの会が目指す支援
  - 3. 2. 1 きっかけづくりの路上訪問
  - 3. 2. 2 地域生活支援ホームの機能
  - 3. 2. 3 地域や行政とのつながりを生む風まちサロン
- 3. 3 スープの会の機能

### 4. THE BIG ISSUEとスープの会からみるあるべき社会復帰の要件

### 5. ホームレス問題のこれから

- 5. 1 日本のホームレスの変容
  - 5. 1. 1 若年化するホームレスの実態
  - 5. 1. 2 若者ホームレスが抱える問題
- 5. 2 若者ホームレス支援の今後の課題

おわりに

参考・引用文献

図表

## はじめに

世界的に見ても、豊かであり、先進国と言われる日本。しかし、一歩外に出れば日常生活の中で公園や駅でホームレスと呼ばれる人々をよく目にする。このような光景は、日本だけではなくアメリカやイギリス、フランスなどの先進国も含め、世界中で同じような状況である。私は、ホームレスを目にする度、なぜ豊かな国と言われている先進国においても職や賃金に困り、家を持つことのできないホームレスは存在するのだろうかという疑問を持っていた。街でホームレスを見かけても、見て見ぬふりをしたり、ホームレスになったのは個人の責任であるという人もいたりするだろう。しかし、本当に個人の責任と投げ出していいのだろうか。個人の責任ではなく、社会の責任とは言えないのだろうか。ホームレスに至った経緯は人それぞれあるが、少なからず自ら望んでホームレスになり、路上生活を送っている人だけではない。社会として、貧困の連鎖を断つ機会を与えられなかったり、就労の機会を与えることができなかつたりと個人の責任とは言い切れないと私は考える。先進国と言われている国のどのような社会がホームレスを生み出してきたのか、またホームレスが自立して生活していくには、どのような支援が必要なのか考えていきたい。

現在、日本も含め、世界中にホームレスの支援団体が存在している。私が支援団体の存在を知り、ホームレス問題にも解決の兆しがあるのではないかと感じたのは、講義内でゲストスピーカーの新部さんの話を聞いた時だった。その時、初めてスープの会という路上訪問や地域生活支援ホームの運営などの支援を行っている団体を知り、ホームレス支援の現状やホームレス支援についてさらに興味がわいた。

また、この大学生活の4年間の中で、暑いときでも寒い時でも、早稲田駅前で THE BIG ISSUE を売っている人を何度も目にした。以前から、街を歩いている際に THE BIG ISSUE を掲げ、売っている人を見たことはあったが、特に目に留めたことはなかった。しかし、ある日、母が THE BIG ISSUE を買って来た。その時、表紙に印刷してある「ホームレスの仕事をつくり自立を応援する」という言葉に目を奪われた。THE BIG ISSUE のような当事者自身で職を手に入れ、当事者の売り上げから賃金を生み出すという支援が存在することを知り、ホームレス問題の解決につながるような新しい糸口になるのではないかと感じた。

本論では、ホームレスが路上から脱し、自立して生活していくために、あるべき支援について物理的支援と心理的支援との双方から考えていく。

## 1. ホームレスについて

### 1. 1 ホームレスとはどのような人たちなのか

日常生活の中で、多くの人々が、公園や空き地などにダンボールや青いテントを張って暮らし、空き缶などを集めているホームレスを目にすることがあるだろう。

平成26年1月に実施された厚生労働省の調査によると、全国の路上生活者数は7508人であり、昨年の調査結果である8265人と比較すると9.2%減少したといえる<sup>1</sup>。調査結果によると、毎年ホームレスの数は減少し続けている。しかし、2008年以降のリーマン・ショック以降の世界同時不況により、日本でも多くの企業が倒産に追い込まれ、多くの失業者が溢れ、新卒者ですら就職が厳しい昨今の日本の社会において、日本全体のホームレスの数が年々減少傾向にあるのは、少し不思議な話といえる。これに対して、厚生労働省は、緊急一時宿泊施設の設置など各自治体でのホームレス対策が進んだことや生活保護制度を利用した人々の増加、さらに移動型のホームレスの人々が増え、調査不能の人々が増加したことなどを理由に挙げている。

しかし、そもそもホームレスの定義とは何なのだろうか。日本でのホームレスの法律上の定義を定めているのは、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」(2002年)である。この法律においてホームレスとは、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいるもの」をいう。つまり、ホームレスという言葉はまさに「家がない」ということを表し、もともと居住して生活を営んでいた場所を何らかの理由で喪失し、その結果、本来住居することが前提とされていない、社会的に容認されていない場所に居住して生活を営まざるを得ない状態である人々のことを表している。

厚生労働省の調査結果であるホームレスの数は、「定義に当てはまるホームレス」を目視調査で割り出したものである。しかし、このホームレス以外にも帰るべき家を持っていない人々も数多くいる。荷物を持ち歩いて、ネットカフェに泊まったり、一時的なシェルターに避難していたり、知り合いの家を泊まり歩いて生活している人々も増えてきているのが現状である。

ホームレスの法的な定義は、先ほど述べたが、果たしてこの定義だけで十分なのだろうか。ホームレスとは、住宅を通して広がる地域住民としての、また職場に帰属する働く人としての、さらに、家族の一員としての、社会集団への帰属の喪失をも意味しているのではないだろうか。さらに、日本では戸籍という形で国家に掌握され、戸籍で日本国民という帰属性を獲得し、住民として分けられる。住所があることで、住民としての地位とこれに付随した権利義務を獲得するのだ。つまり、ホームレスは、住むべき場所を失ったと同時に社会的な意味での生きていく場所の喪失をも意味していると考えられる。

---

<sup>1</sup> 厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果について」  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000030rlj.html>

## 1. 2 ホームレスを生み出した社会構造や社会的要因

THE BIG ISSUE JAPAN を立ち上げた佐野章二は、人が屋根のある生活から路上への生活になるには 3 つの課程があるという。「第一段階が『仕事を失う』」「第二段階が『家を失う』」「第三段階が人との絆を失う」とある。これらの課程を経て、人々はホームレスになる。これを佐野章二は「ホープレス(hopeless)からホームレス(homeless)へ」と名付けている。人々が仕事を失ったとしても、家を失ったとしても、周りに支えてくれるような、頼れるような家族や友人などの様々な人とのつながりや絆があれば、人々はそう簡単にはホームレスにはならない。人々がホームレスになる時、それは未来への希望「ホープ(hope)」を失った時である。支えてくれる人、頼ることができる人とのつながりが切れてしまったときに人々は「ホープレス」となり、その状態が続いてしまった結果、居場所であるホームを失い、ホームレスになるのである。

なぜ人々はホームレスになるのか。この答えは、日本の雇用や失業問題と強く結びついている。以前は仕事をしてきたが、リストラや個人の健康状態など、様々な理由で辞めざるを得なくなった人々が次の仕事に就けずに、失業状態から抜け出せない日々が続き、所持していたお金も底をつき、路上生活せざるを得なくなる。これが日本においてホームレスになる一番の原因である。

これまでのホームレスは基本的に中高年の男性が多い。この人々の多くは、主に土木建築業に従事してきた日雇い労働者で、年齢と共に仕事がなくなったり、体調を崩したりして、再就職できなくなった人たちである。日本の高度経済成長が終わり、バブル経済がはじけ、日本が情報化社会に突入した頃、これまで土木建築業に勤しんできた人々は時代に取り残されてしまった。また、現在 60 歳前後の日雇い労働者の多くは、地方から出てきた人たちである。農家などの長男は、土地や財産などを守るために実家を継ぐが、それ以外の子どもは、仕事を得て食べていくために、都会に働きに行かざるを得なかったのだ。これは、日本の労働者全体に当てはまる構図である。時代と共に仕事がなくなっていく人々には、住むべき家もなければ、帰る故郷もなくなっていたのである。

## 1. 3 ホームレスに対する国の支援の現状

ホームレスの数が増加し、社会の関心を集めるようになったのは、バブル崩壊とその後の産業構造が転換した 1990 年代である。90 年代までは、大都市の地域問題として、自治体で対策がとられてきたホームレス問題だったが、90 年代に急激に都市の公共空間に増加したホームレスに対する政策は、生活保護制度以外になく、貧困問題として生活保護法にまとめ、福祉事務所が相談窓口になっていた。しかし、こうした対象は最低限度の生活は保障されても、社会復帰に向けての具体的なプログラムを示さない限り、ホームレスのニーズに応えることはできなかった。この問題に対し、政府は、1999 年に厚生省、労働省を中心に「ホームレス問題連絡会議」を設置し、「ホームレス問題に対する当面の対応策」をとりまとめた。この結果 2000 年度から、ホームレス支援の項目が予算化され、自治体による宿泊や食事の提供、健康管理、生活相談、職業相談などの自立支援事業への補助が開

始された。

さらに 2002 年に制定された「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」は、全国調査に基づいて、国がホームレスの自立支援のための基本方針を策定し、それに準じながら各地方自治体が支援の実施計画を策定すべきことが定められた。

しかし、国の政策は果たして十分といえるのだろうか。2003 年に行われた、ホームレスの実態に関する全国調査を受け、厚生労働省と国土交通省から「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」が告示された。この方針には、就労機会、移住場所及び保健・医療の確保を重点に既存の施策を拡充するほか、生活保護の実施、生活支援、人権擁護、民間団体との連携なども盛り込まれた。しかし、基本的には、従来から各自治体で行われていた施策をバックアップする施策が中心であり、国としての居住や就労の確保には踏み込めていなかった。

ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法を受け、各自治体での自立支援実施計画の策定は、大都市におけるシェルターと自立支援センターの設置を中心に行われた。しかし、果たして国や地方自治体の支援は十分といえるのだろうか。特に自立支援センターでは、入所者の自力開拓の就労がなかなか容易ではないことや、それにも関わらず、入所から予定される自立退所までの期間がかなり短いこと、さらに就労退所後も多くは継続した支援が必要であるが、退所後のケアは保障されていないことなどの課題が挙げられる<sup>2</sup>。

ここで、本論の冒頭で言及したホームレスは、「個人の責任ではなく、社会の責任とは言えないのだろうか」という問いに対する答えが見えてくる。ホームレスになった経緯は人それぞれあるが、国は自治体に任せ、全ての自治体が全ての対象者に対して支援を行えているわけではない。つまり、ホームレスは、2 節で述べたように社会の雇用や失業問題が原因で生み出され、その後の支援も十分いきわたっていない、社会が生み出した問題であるといえる。

国は、自治体にまかせ、自治体にとってもホームレスはあくまでも「対象者」でしかない。縦割り行政であり、自治体からホームレスへの一方的な矢印しかない国の対策だけではなく、一人一人の当事者側から支える、支援者と被支援者の両者のつながりがある支援が必要であると考ええる。

## 2. THE BIG ISSUE

### 2.1 THE BIG ISSUEについて

現在では世界中で見かけることができる THE BIG ISSUE は、1991 年にゴードン・ロディックとジョン・バードによってイギリスのロンドンで創刊された。THE BIG ISSUE

---

<sup>2</sup>柳沢房子,2006,『ホームレス支援政策をめぐって—各国の動向—』

[http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/200602\\_661/066104.pdf](http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/200602_661/066104.pdf)

は、ホームレスの人たちの自立支援を目的としたものだったが、雑誌の内容はホームレス問題に関連する記事ばかりではなく、様々な社会問題を扱った硬派な記事や、映画や音楽などエンターテインメントに関する記事などバランスのとれた雑誌である。発売を開始した頃は、10人の販売者によって販売されており、1993年までは月に一度の発行だったが、現在、ロンドンでは週に一度発行されており、多くの通りでホームレスの人々が販売している。新聞ですら無料で手に入るイギリスだが、多くの人が街で立ち止まり、£2.5払い、ホームレスの人々と会話を交わし、THE BIG ISSUEを手に入れている光景をよく目にした。イギリスでは、THE BIG ISSUEの知名度はかなり高く、王室や政府との関係も良好であり、多くの企業から多額の広告収入をもらっている。

THE BIG ISSUEはロンドンで発行されたが、その後様々な都市、国に広まっていった。各地に広がり、支持を得る理由がある。それは、ロンドン版 THE BIG ISSUEが各地に広がっていくのではなく、その新たな土地において新たな THE BIG ISSUEが設立されて行くのである。ロンドンから始まった雑誌『ビッグイシュー』は現在、英国に4誌、世界に9誌（ナミビア、南アフリカ、ザンビア、ケニア、エチオピア、オーストラリア、韓国、台湾、日本）あり、それぞれが独自の編集部を持ち、自分たちの土地にあった THE BIG ISSUEを刊行している。

日本での販売は、2003年9月11日、佐野章二によって開始された。THE BIG ISSUEの仕組みは、販売者になるとまず初めに10冊無料で支給され、それらを全部売ることによって3500円の収入になる。その売上げ(3500円)を元手に、以降は1冊170円で仕入れ、売っていく仕組みとなる<sup>3</sup>。つまり、1冊売り上げることで180円が販売者の収入になるということだ。現在では、札幌、仙台、金沢、東京、神奈川、千葉、名古屋、大阪、京都、奈良、神戸、岡山、福岡、熊本、鹿児島で1日と15日の月2回、販売している。

THE BIG ISSUEは、「チャリティではなくビジネスを」をモットーにしている。支援する側が永遠に「施し(チャリティ)」を続けることができないのであれば、当事者自身が自力で収入を得る「仕事(ビジネス)」を創出しなければ、持続可能な支援とは言えない。支援者と被支援者の共倒れにならないために、両者の持続性を保つために、ビジネスという新しい形のホームレス支援が必要であると考えたのである。

さらに、THE BIG ISSUEには7つの特徴がある。

- ①緊急支援ではない、明日につながる支援活動(仕事を提供する)
- ②モノやカネではなく、それを稼ぐ機会、チャンスを提供する
- ③社会問題の当事者を問題解決の担い手にする
- ④ビジネスの手法で社会問題の解決に挑戦する(社会的企業である)
- ⑤ホームレスをビジネスパートナーにする
- ⑥ボランティアも参加できる会社(ハイブリッドな会社組織)
- ⑦NPO(ビッグイシュー基金)と両輪で活動する

(佐野 2010:p267)

---

<sup>3</sup> ビッグイシュー販売の仕組み

<http://www.bigissue.jp/sell/system.html>

つまり、THE BIG ISSUE とは、問題の当事者が問題解決の担い手になれる、そんなチャンスを提供し、これに一個人、一市民であるボランティアが自由に加わり活動できる環境や組織であるということだ。

## 2. 2 THE BIG ISSUEが目指す支援

前節では、THE BIG ISSUE の仕組みや特徴などを述べたが、この節では THE BIG ISSUE の支援について述べていく。

### 2. 2. 1 雑誌販売からみる THE BIG ISSUE

THE BIG ISSUE の販売者になるための条件は、ただ一つだけである。それは、「ホームレス状態にあること」である。つまり、定まった住居がないということの意味する。住所、身分証、電話番号、販売経験、資格、履歴書、保証人などがなくてもできる仕事である。ホームレスの人々が職に就きたいと考えても、住所不定者であるため、容易ではない。そのため、THE BIG ISSUE の販売者になることは職を得る近道といえる。職を手にし、売上げから簡易宿泊所に泊まったり、売上げを地道に貯め、アパートに入ったりする人もおり、路上を脱する第一歩になる。まずは路上生活を脱し、屋内での生活を確保し、精神面でも体力面でも整え、人間として最低限の生活レベルを確保することが日本版 THE BIG ISSUE の第一目標である。

第1節でも述べたが、世界各地に THE BIG ISSUE は存在しており、「セルフヘルプ」という共通の概念を持って日々活動している。セルフヘルプとは、ホームレス問題の当事者であるホームレスの人々が自ら働いて自立を目指していこうとする考え方である。つまり、当事者自身の力で、自身が陥っているホームレス問題を解決していこうとするものである。この概念に共鳴する人々により、THE BIG ISSUE は世界中に広がっていった。当事者の力で雑誌販売という職を手に入れ、その売上げで賃金を手にし、自分たちの力で生きていく THE BIG ISSUE は、ホームレスにとって物理的支援といえる。

### 2. 2. 2 人とのつながりからみる THE BIG ISSUE

1項ではホームレスの人々に対して、物理的支援として、雑誌販売という仕事の提供から THE BIG ISSUE をみてきたが、THE BIG ISSUE には、もう一つの働きがある。

それは、雑誌販売を通して広がる人とのつながりである。雑誌販売を通じ、様々な人と出会い、つながることで、人や社会との触れ合いから自信をつけ、自尊心を芽生えさせる働きもあり、THE BIG ISSUE には心理的支援の面もあるといえる。

今まで見て見ぬふりをされ続けてきたホームレスが、また人目につかないように生活してきた当事者自身が、雑誌を掲げ、道の真ん中で声をあげて雑誌販売をする。後楽園付近で THE BIG ISSUE を販売している金井さんは、最初は自分がホームレスであることを多くの人の前で証明しているようで抵抗はあったが、毎回の発売を楽しみにしてくれている人やたまたま買った人と話すのが本当に楽しみになったと述べた。

長い路上生活の中で、孤独を感じていたホームレスの人々が雑誌販売を通じ、もう一度人とのつながりを回復していくのである。販売者の人々にとって、THE BIG ISSUE は、



単なるお金を稼ぐためのビジネスだけではなく、人とのつながりを生み出すものであるのだ。

THE BIG ISSUE は、当事者以外にも新たな大きな変化をもたらした。今までは、ホームレスの人々の存在に気づき、どこか気にしていても、何もできなかった人々は多くいたはずだ。食べものを渡したり、炊き出しなどのボランティアに参加したりするのは気がひける人々も、路上で THE BIG ISSUE の販売員を見かけ、350 円を出すことはできるかもしれない。そこから始まる販売員とのつながりは両者にとって新たな出会いである。

THE BIG ISSUE は、世の中の人々のホームレスに対するイメージも大きく変え、人々に新たなきっかけを与えたといえる。

## 2. 3 THE BIG ISSUEの機能

1 節と 2 節では、THE BIG ISSUE の物理的支援と心理的支援について述べてきた。当事者であるホームレスの人々に対する雑誌販売という仕事の提供や社会とつながる機会をつくる機能だけではなく、ホームレスの存在を社会に知らせる機能も果たしており、1 節でも述べたとおり、世界中で高く評価されている。ホームレスを支援しながらも、社会的にホームレスの存在を人々に認識させ、これまでのホームレスのイメージを大きく変えた。

しかし、この THE BIG ISSUE の仕組みで、全てのホームレスが自立して生活していけるのかと考えると、必ずしもそうとは言えない。中には、売り上げをこつこつ貯め、アパート生活を送ることができるようになった人もいるが、ごくわずかである。ホームレスの人々が自立して生活していくためには THE BIG ISSUE のような支援と並行して、どのような支援が必要なのだろうか。

## 3. スープの会

### 3. 1 スープの会について

スープの会のホームページによると、スープの会の取り組みは、「路上」から「地域」へと「暮らしの場」を紡ぐものとして、大きく 3 つある<sup>4</sup>。

1 つ目は、路上訪問である。毎週土曜日の夜、新宿近辺のホームレスを訪問する取り組みである。パンや味噌汁などの炊き出しと共に、フリーダイヤル電話相談の案内ビラなどを配りながら、一人一人を訪ねて、声をかけている。訪問を通じて、路上に人と人との出会いを育むことから始めるためである。路上訪問での会話から、ホームレスの人々の近況を把握したり、健康状態を確認したりしている。

---

<sup>4</sup> スープの会

[http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/supuno\\_hui\\_biao\\_zhi.html](http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/supuno_hui_biao_zhi.html)

2つ目は、フリーダイヤル電話相談である。路上訪問で出会った人から、医療や仕事探し、社会福祉諸制度の利用について相談にのる取り組みである。場合によっては、病院やハローワーク、福祉事務所などへの付き添いも行っている。

3つ目は、スープの会・地域生活支援ホーム(小規模・多機能グループホーム)の運営である。生活保護などを利用しつつ「地域社会」へ入っていこうとする人々の生活を支援している。宿泊所やグループホームを運営し、路上からアパート生活などに移行する人々が移行するまでの手続きや、移行してからの生活をサポートしている。

このように、ホームレスの人々が路上から脱することができるように段階を踏んで支援している。当事者が「これからどう生きていきたいのか」ということを当事者自身に考えさせ、本人が選択できるような自立を支えるための社会関係をつくりあげている。スープの会では、路上訪問での当事者とのつながりを大きな土台として、人や地域社会との接点を設け、地域の中で自立し、暮らしていけるようにサポートをしている。

次に風まちサロンについて述べる<sup>5</sup>。風まちサロンとは、スープの会が運営している、いつでも、誰でも気軽に集うことができ、人と人とのつながりを生む場所である。アパートや地域生活支援ホームで生活を始めた元ホームレスの人や一人暮らしの高齢者、病気や障がいをもつ人、また近所の小学生など、年齢層は幅広く、交流の場として開放されている。風まちサロンには、コーディネーターがおり、地域の人々が抱える福祉サービスなどの不安や疑問を解消するような相談をも受け付けている。また、土曜日の路上訪問の際に持っていく味噌汁などの下準備も風まちサロンで行われている。風まちサロンでも、多くの人に人や地域社会とのつながりの機会を設け、人々が安心して地域の中で暮らしていけるようなサポートを行っているのである。

### 3. 2 スープの会が目指す支援

前節では、スープの会や風まちサロンがどのような支援をしているのかということについてみてきた。第2節では、スープの会が現在行っている支援と共に、目指している支援の姿に焦点を当てる。

スープの会は、ホームレス状態にある人が路上を脱し、家の中で生活することを最終目標とはしていない。むしろ家の中に入って生活を送るところからがはじまりなのである。

#### 3. 2. 1 きっかけづくりの路上訪問

1節でも述べたが、毎週土曜日に15時から風まちサロンにて路上訪問で渡す味噌汁などの準備をし、19時から訪問活動をしている。誰もが参加することができるこの活動は毎回参加する人々が異なり、様々である。集合後、参加者で自己紹介や引継ぎの確認などのミーティングが行われる。路上訪問には地上西口コース、地下東口コース、中央公園コース、戸山公園コースの4つのコースがあり、参加者は自由に自分の好きなどところに行くことが

---

<sup>5</sup> スープの会・風まちサロン

<http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/fengmachisaron.html>

できる。何度も路上訪問に参加し、様々なコースで多くのホームレスの人々と関わった参加者によると、場所によって雰囲気は全く異なるとのことだった。路上訪問では、風まちサロンで作った味噌汁や、近所のパン屋さんからいただいたパンなどを渡しながら、近況等を聞きだしたり、困っていることがないか聞いたり、一緒に会話したりする。ホームレスの人がスープの会の人に直接困っていることを伝えるケースだけではないため、会話の中から些細な変化を見つけることが必要であるという。路上訪問後には、参加者でミーティングをし、各訪問コースからの報告の時間が設けられている。身体の調子が良くない人や、気になる言動があった人を報告し、全員で把握するためである。このようにスープの会として、全員で状況を把握し、共有することでしっかりとした横のつながりを生んでいるのだ。

食糧などの必要なモノを配りながら訪問している路上訪問は、一見、ホームレスの人々にとって、物理的支援にみえるかもしれないが、食糧や毛布などのモノはあくまでも、会話を始めるための材料であるため、物理的支援とは言いきれない。むしろ、当事者にとって、今なにが必要なのか、これからどうしていきたいかを一緒に考えたり、他愛もない世間話や自分たちの話をしたりすることで人々とのつながりを生んでいる心理的支援といえる。

ホームレスの人々とスープの会が出会う最初の場所がこの路上訪問である。路上訪問での人とのつながりから、地域生活支援ホームに入ったり、風まちサロンの存在を知ったり、社会保障諸制度を利用したりするなど地域社会の中で暮らしていくスタート地点に立つのである。路上訪問は、ホームレスの人々が路上生活から脱するためのきっかけづくりを担っているのである。

### 3. 2. 2 地域生活支援ホームの機能

第2節1項で述べたように、路上訪問からホームレスの人々にとって、人とのつながりを生み出すスープの会は、心理的支援の面が大きいように感じるが、それだけではない。1節でも挙げたようにスープの会は地域生活支援ホームの運営という物理的支援も行っているといえる。

ここでは、スープの会・地域生活支援ホームのホームページをもとに述べていく<sup>6</sup>。スープの会が運営している地域生活支援ホームは、大規模・選別収容型に相対するモデルの一つとして、「小規模・多機能型」のグループホームとして運営されている。運営体制として、3つのタイプが挙げられる。

第一に、第二種社会福祉事業宿泊所<sup>7</sup>として開設され、一軒家を活用して24時間スタッフが常駐している「やまぶき舎」である。スープの会の地域生活支援ホームの拠点ホームとして、様々な在宅サービスの導入をサポートしている。生活状況に応じ、関連の地域生

<sup>6</sup> スープの会・地域生活支援ホームホームページ

[http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/de\\_yu\\_sheng\\_huo\\_zhi\\_yuanhomu.html](http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/de_yu_sheng_huo_zhi_yuanhomu.html)

<sup>7</sup> 第二種社会福祉事業:社会福祉事業とは、社会福祉を目的とする事業のうち、規制と助成を通じて公明かつ適正な実施の確保が図らなければならないものとして、法律上列挙されており、第1種と第2種に分けられる。第2種は、比較的用户への影響が小さいため、公的規制の必要性が低い事業(主として在宅サービス)が挙げられる。

活支援ホームや居宅への転宅、他機関・他施策に基づく施設への移行を担っている。

第二に、巡回型のグループホームとして、スタッフが定期訪問によりサポートをしている「おもかげ舎、あかとき舎、上落合荘、北新宿荘」である。小規模グループホームとして、原則としては、緊急一時宿泊所として運用されているが、長期滞在を見越しての利用やアパートなどへの転居を前提とした生活訓練の場としての短期利用など、生活実体に合わせて、柔軟に運営されている。

第三に、完全な一般アパートをスーパの会が仲介して、借り上げ、屋根の下での一人暮らし体験の場として運営されている借り上げアパートタイプである。スタッフの巡回により、日常生活がサポートされている。

このような3つのタイプから、当事者が入るべき地域生活支援ホームに入り、地域の中で暮らしていくことを実感するのである。

スーパの会の人々や行政の介入があり、保護施設や簡易宿泊所、アパートなどに移行してきたとしても、多くの人々が再び路上生活に戻ってくることもある。なぜこのようなことが起こるのか。それは、路上生活が長かった人々が地域の中で暮らしていくことには様々な問題があるからである。今まで集団生活を送ったことのなかった人が集団生活を送ることにより、どのように暮らしていけばいいのかわからず、孤立してしまうことや、路上生活が長すぎるあまり金銭管理や家事などの日常生活技能を失ってしまった人などが挙げられる。もしこのような人々に地域とのつながりがあり、頼ることができる人がいたら、暮らしのサポートすることができたら、再び路上生活に戻るサイクルはできないとスーパの会は考えたのである。

ここで、スーパの会のホームページより、スーパの会が運営している地域生活支援ホームの機能を述べ、スーパの会が目指す地域社会とのつながりから路上生活を脱する支援について考えていく。

1「居所」を提供することにより、稼働年齢層における「要保護者」の生活保護申請の足場とする。

住所不定者とされるホームレスの人々は、社会保障諸制度において、様々な制約が課される。地域生活支援ホームは、スーパの会の路上訪問や電話相談で出会うホームレス、「要介護者」の人々に対して生活保護申請のための「住所」を提供している。

## 2「生活技能訓練」の場としての、通過型グループホーム

長い間、路上で生活してきたホームレスの人々の中には、金銭管理や家事などの日常生活技能を失ってしまった人がいる。そのような人に対して、地域生活支援ホームでは、規則や規律に縛られた施設ではなく、地域の中にある小規模なグループホームとしての特徴を活かし、身の回りの基本的な生活技能や対人関係の力を身に付け、小さなコミュニティの中で生活を送ることができる。グループホームで暮らしていくことが最終目標ではなく、アパートなどで各自が生活を送る準備をするための通過型のグループホームといえる。

## 3 地域で生活したい、という「実感」を見つける場

2で「生活技能訓練」の場としてのグループホームと述べたが、基本的な生活技能が身に

付けることができたとしても、地域の中で暮らしていくことができるとは限らない。何よりも、当事者自身が地域の中で暮らしていきたいと思い、実感することが必要不可欠である。地域生活支援ホームは、大きな収容型の施設の規律を守り、管理される環境とは違い、地域の中で地域の人たちと触れ合いながら生活を送ることができる環境が用意されている。また、地域生活支援ホームだけではなく、スープの会が運営する風まちサロンでも人々と交流し、関わりをもち、「出会いの場」を提供している。スープの会は、『人々との出会いの場』づくりこそ、地域社会との『絆』づくりにおいて、なくてはならない要素だ」と考えている。

4「地域生活支援ホーム」を離れて、アパートなどでの単身生活に入った方々のサポート(デイサービス)・地域住民の生活相談に関わる、相談室としての機能  
スープの会では、地域生活支援ホームを出て、アパートなどで新たな暮らしを始めた人々にも広くサポートを行っている。スタッフやボランティアによる生活相談を随時受け付けており、風まちサロンを活用して、出会いの場づくりを提供することはもちろんのこと、日常生活の中で見つかる課題の勉強会を企画するなど地域社会における人とのつながりを広げている。

このようにスープの会が運営する地域生活支援ホームは「小さな『家(ホーム)』を街中に」というスローガンを掲げながら、様々な機能を持ち合わせている。機能1の居所を提供するや機能2である生活技能訓練の場としてのグループホームという面では、物理的支援といえるが、機能3の実感を見つける場や機能4の単身生活に入った方々のサポートや相談室という面では、物理的支援ではなく、心理的支援も行っているといえる。長く路上生活を送ってきた人々がこれから地域の中で暮らしていくためには、住む場所を提供する、物理的支援だけでは不十分であり、今後地域の中で暮らしていくために人々とのつながりを生み出す心理的支援という双方の支援が必要であるといえる。

### 3. 2. 3 地域や行政とのつながりを生む風まちサロン

風まちサロンとは、いつでも、誰でも気軽に集うことができ、人と人とのつながりを生む場所であり、いくつかの機能があると考えられる。1節でも述べたが、風まちサロンはホームレスの人々だけではなく、すべての人々に開放されている場所であるが、この項では、路上生活を脱し、これから地域社会の中で暮らしていく人々をサポートする機能について重点的に取り上げる。

一つ目は、地域社会とのつながりをもたらす機能である。地域生活支援ホームを出て、アパートなどで暮らすようになった人々に対する支援である。相談窓口での相談はもちろんのこと、風まちサロンに来ている様々な人との交流を通して、地域の中で暮らしていくことができるように第三者として風まちサロンという場を提供し、サポートしていくのである。

二つ目は、行政とのつながりを担う機能である。路上生活を脱し、地域生活支援ホームに入り、社会保障諸制度を利用する人々は数多くいる。路上生活を脱してから、社会保障諸制度の利用により、行政との関わりが始まるのである。もともとホームレスであった人々

が社会保障諸制度を継続して利用していくための機能を風まちサロンは担っているのである。行政は、あくまでも「縦割り行政」であり、社会保障諸制度を利用している人々を「対象者」としか扱わない。しかし、風まちサロンでは、行政との「横のつながり」を作っていく、一人一人の当事者側に立って、支援しているのである。

### 3. 3 スープの会の機能

2 節では、スープの会の路上訪問や地域生活支援ホーム、風まちサロンの機能について述べてきた。この節ではそれぞれの支援の関係性を明らかにし、スープの会が行っているホームレス支援の機能とこれからについて考えていく。

第一に、ホームレスと出会い、コミュニケーションをとり、人とのつながりを生む路上訪問は、ホームレスの人々が路上生活を脱するためのきっかけづくりであるといえる。そこで、地域の中で暮らしていきたいと願う人や健康状態が良くない人などは、第二の段階として、地域生活支援ホームに入り、家という住む場所を提供する。しかし、地域生活支援ホームは、家だけではなく、地域社会の中でどのように暮らしていくのかを身に付けたり、当事者自身が地域社会の中で暮らしていきたいと思う気持ちを芽生えさせる場所である。また、地域生活支援ホームをでたあとのサポートとして第三に、風まちサロンの存在がある。(図3-1)

スープの会は、段階ごとに当事者側に立ち、支援し続けているのである。路上訪問では、食糧などの「モノ」を、また、地域生活支援ホームでは住む場所である「家」という物理的支援を通じて、人や地域社会とのつながりなどの心理的支援を提供している。地域の人々とのつながりを大切にし、当事者が孤立せずに、地域の中で人々と共に暮らしていくことができる体制を整えることこそがホームレスが路上生活から脱し、再び路上に戻ってこないために必要だと考える。

## 4. THE BIG ISSUEと

### スープの会からみるあるべき社会復帰の要件

2 章では、THE BIG ISSUE について、3 章ではスープの会について述べてきた。この節では、双方の支援の共通点からあるべき支援について考え、ホームレスのあるべき社会復帰の要件について考える。

THE BIG ISSUE もスープの会もホームレス支援といっても、心理的支援と物理的支援が存在していた。つまり、職や衣食住が手に入る物理的支援だけでは成り立たず、また一方で人や地域社会とのつながりをもたらす心理的支援だけでもホームレス支援は成り立たないのである。物理的支援と心理的支援のそれぞれの支援がそれぞれの役割をしっかりと果たし、双方が存在することでホームレス支援は成り立つのである。

ホームレスが社会復帰する際にあるべき要件は、職業や家など生活していくために必要

なモノと地域社会で生活していこうとする当事者の気持ちや生活を継続していくための支援である。これらがしっかり整っていれば、一度路上を脱したホームレスが再び路上に戻ってくる事のない社会を生み出すことができると考える。

## 5. ホームレス問題のこれから

### 5. 1 日本のホームレスの変容

#### 5. 1. 1 若年化するホームレスの実態

2008年9月15日のリーマン・ショック以降、ホームレスの様相が変化してきた。世界同時不況、大企業によるリストラ断行、派遣の雇い止めなどにより、ホームレスが「若年化」したのである。(佐野 2010:162) THE BIG ISSUE でも毎年、販売者が低年齢化している。販売者登録をした人の平均年齢は、2007年に50.5歳だったが、2009年には、41.0歳にまで下がっている。(飯島 2013:27)まず、1章で取り上げてきたような50代、60代の肉体労働をしてきたホームレスとは異なる「40代ホームレス」が増えた。社会の不況により、大幅な給料カットやリストラにあい、ホームレスになってしまうケースである。しかし、この40代ホームレスには、まだ救いがあるような気がする。あらゆる年代のホームレスの人たちの中で、いちばん現状の自分の立場をよく理解している。ホームレス状態になってしまった自分の境遇を嘆きながらもしっかり現実を認め、そこからいかにして脱出できるか試行錯誤を試みている。それは、その年齢まで社会で働いてきた実績も、自信もあるため、機会さえあれば、再び社会に出て働いていくスキルも意欲も持っているのだ。(佐野 2010:163-164)

しかし、2008年以降増えているのは、40代ホームレスだけではない。20代、30代などの「若者ホームレス」である。一体どれくらいの数の若者ホームレスが存在しているのだろうか。この問いに答えるのはとても困難なことである。なぜなら、若者ホームレスは、不可視化された存在だからである。これまで述べてきた中高年ホームレスとは違い、路上生活を営んでいない。ネットカフェ、漫画喫茶、ファーストフード店、サウナ、個室ビデオ店など路上以外にも目に見えないホームレスは存在し、ホームレスの形態は多様化しているのである。2007年に厚生労働省によって調査された「ネットカフェ難民」が5400人はいると推計された<sup>8</sup>。また、若いホームレスを生む土壌として、ひきこもり70万人(2010:内閣府調査)、若年無業者(ニート)63万人、フリーター178万人(2009:労働力調査)が結果として出ており、合わせて311万人もの若者がここに含まれている。しかし、不可視化されていない存在が故、いまだに正確な数は出ていない。

#### 5. 1. 2 若者ホームレスが抱える問題

今までの50代、60代ホームレスの人たちも、様々な事情を抱えてホームレスになった

---

<sup>8</sup> 厚生労働省 広義のホームレス実態調査について

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000004c72-att/2r98520000004ca0.pdf>

が、それでもかなりの部分で共通するところがあった。ほとんどの人々は失業が問題なのであり、「働きたい」という意思を持ちながらも、仕事を見つけることができない人々であった。しかし、若者ホームレスは何を望んでいて、どのような生活を送りたいのかが見えてこない。おとなしく、無口で自分のことを話したがらず、他人に関わらない代わりに、踏み込んできてほしくない様子がありありと見てとれる。(佐野 2010:168-169)

2009年に生い立ち、仕事経験、今の生活、人間関係、今後の望みなどのヒアリング調査「若者ホームレス 50人聞き取り調査」が実施された<sup>9</sup>。抑うつ傾向にある人が4割もあり、自殺を考えるケースから、時々落ち込むことがあるというものまで、程度は様々である。帰るべき家のない過酷さ、展望のなさが孤独感や疎外感を強め、抑うつ状態をつららせている。ホームレス状態の生活が長期に及ぶほど、抑うつ傾向は高まっていく傾向にある。いざというときに、頼れる友人や、困った時に相談できる仲間がいると答えた人は、ごく少数である。また、ホームレス状態になり、家を出てしまったことで家族などとの人間関係が途切れてしまった人も多い。7割を超える人が家族と連絡が取れない、または取らない状況にある。このように、調査結果は、ホームレスというよりも現代の若者が抱える心の問題、社会や家族に対する彼らの孤独な心情と関係性であった。若者ホームレスが直面している問題を大きく4つに分類することができる<sup>10</sup>。医療サービスからの排除、情報不足などの「緊急性の高い問題」、生活能力の不足や公的セーフティネットの限界などの「暮らしの問題」、心と身体の病、関係喪失と孤立化などの「心と身体の問題」、そして経験と職業観の不足などの「就業の問題」である。

これまでの中高年のホームレスとの一番の違いは、若者ホームレスには心安らげる居場所、家や家族といった「ホーム」が幼いころからなかったことである。中高年のホームレスが主に失業のためホームレス状態になっているのとは対照的に、若者ホームレスは、失業以前の問題として心に「孤独」を持っていることが明らかになった。

また、職業観も中高年ホームレスと若者ホームレスとでは大きく異なってくる。主に若い頃は、肉体労働に従事してきた中高年ホームレスは、怒涛の時代を生き抜いてきた誇りのようなものを持っている。しかし、若者ホームレスは、仕事のやりがいを感じることはできず、仕事に対する自己肯定感も低い。その結果、ホームレス状態にあっても、就職活動をしていない人が8割近くにも及んだ。

## 5. 2 若者ホームレス支援の今後の課題

1節で述べたように、若者ホームレスは増加傾向にある。しかし、まだ若年層向けの福祉対策が整っていないのが現状である。日本は、高年齢層や世帯向けの福祉はある程度整備されているが、単身の若年層は、そもそも福祉の対象として想定されていない。そのため、若者がホームレス状態に陥ってしまったときに、申請できるような福祉サービスは生

---

<sup>9</sup> 若者ホームレス 50人聞き取り調査 飯島 2013:28-29

<sup>10</sup> 若者ホームレス白書 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金  
<http://www.bigissue.or.jp/pdf/wakamono.pdf>



活保護しかないのである。

このような状況の若者ホームレス問題に対して、どのような支援が必要なのだろうか。1節で述べた若者ホームレスの4つの問題(緊急性の高い問題、暮らしの問題、心と身体の問題、就業の問題)を一つ一つ改善していかなければならない。特に人とのつながりが希薄な若者ホームレスにとって、人や地域とのつながりを持ち、周りの存在から自身の自己肯定感を高めることが重要であると考え。不可視な若者ホームレスをこれからも増やし続けないために、社会保障諸制度を整え、物理的支援を行うことはもちろんのこと、人々や地域とつながりを持つことができ、自立して生きていこうと思えるように心理的支援を行っていくことが必要である。

## おわりに

本論文では、「ホームレスを生み出した社会とあるべき支援とは何か」という問いを立て、現在世界中で注目されている THE BIG ISSUE と以前ゲストスピーカーとして話をしてくださったスープの会を柱にし、両者がどのような支援をしているのか、物理的支援と心理的支援との双方から紹介し、あるべき支援について考察を進めてきた。その結果、どちらか一方の支援では成り立たず、様々な側面からの支援が必要であり、そのバランスが重要であることを改めて理解した。

執筆中の反省点としては、スープの会の活動にあまり足を運べなかった点である。いろんな支援者やホームレスの人々と出会い、現場のリアルな声を聞き、論文に活かすべきであった。また、THE BIG ISSUE が生まれたロンドンに2ヵ月滞在した中で、販売員の方に話を伺ったり、語学学校の先生にイギリスの社会保障諸制度について話を聞いたりしたにも関わらず、この論文では、それらを活かすことができなかった点である。

本論文の残された課題は、4節に述べた若者ホームレス支援についてである。本論文では、中高年ホームレスを中心に述べてきたが、これらの支援がどのように、若者ホームレス支援に活かせるのだろうかということを考えていきたい。これからの日本社会を担っていかなければならない若者を路上に放置し続けている社会では今後の社会の発展にはつながっていかないだろう。不可視化され、見えづらいのも事実ではあるが、ここで目をつぶらずに、これからの日本のために若者ホームレスをしっかりと捉えていかなければならない。

豊かな国と言われている日本においても、ホームレスは存在し、現在では、帰るべき家を持たずに生活している若者ホームレスが増えてきている。人々が家や職を手に入れ、かつ孤立を感じずに、人や地域とのつながりを実感しながら暮らしていけるような社会を作っていく一員になりたい。

## 参考・引用文献

- 佐野章二,2010,『ビッグイシューの挑戦』講談社
- 飯島裕子・ビッグイシュー基金,2013,『ルポ 若者ホームレス』ちくま新書
- ブレイディみかこ,2013,『アナキズム・イン・ザ・UK』P ヴァイン
- 佐野章二,2013,『社会を変える仕事をしよう』日本実業出版社
- 小笠原浩一・島津望,2007,『地域医療・介護のネットワーク構想』千倉書房
- 岩田正美・岡部卓・清水浩一,2003,『貧困問題とソーシャルワーク』有斐閣
- 岩田正美,2007,『現代の貧困ーワーキングプア/ホームレス/生活保護』ちくま新書
- クリストファー・ジェンクス,1995,『ホームレス』図書出版社
- 厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査)結果について」  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000030rlj.html>  
(2014/12/9 最終閲覧)
- 柳沢房子,2006,『ホームレス支援政策をめぐってー各国の動向ー』  
[http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/200602\\_661/066104.pdf](http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/200602_661/066104.pdf)  
(2014/12/9 最終閲覧)
- ビッグイシュー販売の仕組み  
<http://www.bigissue.jp/sell/system.html>  
(2014/12/10 最終閲覧)
- スープの会ホームページ  
[http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/supuno\\_hui\\_biao\\_zhi.html](http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/supuno_hui_biao_zhi.html)  
(2014/12/17 最終閲覧)
- スープの会・地域生活支援ホームホームページ  
[http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/de\\_yu\\_sheng\\_huo\\_zhi\\_yuanhomu.html](http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/de_yu_sheng_huo_zhi_yuanhomu.html)  
(2014/12/17 最終閲覧)
- スープの会・風まちサロン  
<http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/fengmachisaron.html>  
(2014/12/17 最終閲覧)
- 厚生労働省 広義のホームレス実態調査について  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000004c72-att/2r98520000004ca0.pdf>  
(2014/12/17 最終閲覧)
- 若者ホームレス白書 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金  
<http://www.bigissue.or.jp/pdf/wakamono.pdf>  
(2014/12/17 最終閲覧)

図表

図3-1 スープの会の機能



